

業務展望レポート			
9	前田 裕史	所属名	須崎市教育委員会
		職名	指導主事

[1]研修参加の意義

ネパールでの海外研修参加が決定して以降、ネパールについて知りたいという思いが強くなり、書籍やインターネット等を使い、現地の生活や文化について調べた。また、本研修に参加するまで JICA の活動についても多くを知らなかったため、JICA が取り組んでいることについても調べた。すると、須崎市の中学校が JICA の協力を得て行っている取り組みがあることを知った。身近なところで国際理解・国際交流の学習が進められていることを知るとともに、知ろうとすればもっとあるのではないかという期待感も沸き、これまで知ろうとしていなかった自分に気付くことができた。

ネパールの教育、子どもたちとの出会い、生活環境を知ること等、様々な目的を持って現地に入った。始めはとにかく「日本との違い」にばかり目がいきまわってしまい、マイナス面ばかりが目についた。しかし、その感覚も、ラプグリーンジャパンの方々の取り組みや村落開発普及員の方々の活動、JICA 草の根活動の取り組みを知り、活動されているみなさんの話を聞くにつれて徐々に変化していった。「懸命に生きる姿勢」「よりよく生きようとする姿勢」「学習に真摯に取り組む姿勢」など高齢者から若者・子どもたちから教えられることがたくさんあった。特に、学校現場を訪問したときには、短時間の訪問と交流ではあったが、学習環境が十分とは言えない中で、一生懸命に学ぼうとする様子には心打たれるものがあった。実際にネパールを訪問し、直接感じなければ分からないものだろうと思う。訪問して分かったネパールの良さもたくさんあり、楽しいこともたくさんあった。日本とのつながりを感じることもたくさんあった。



[2]海外研修全般に関する所感

・ネパールでの活動中は、常に「豊かさとは何なのか?」について考えさせられた。「開発途上国」という範疇にあるネパールについて経済的に貧しいというイメージをもって訪問をしたが、物質的に豊かになりつつあるネパールの現状が環境に大きな負荷をかけてしまい、ゴミ処理の問題や電力の問題などを生み出している現状を目の当たりにした。また、山間部まで携帯電話が広まり、ホームステイ先の山の上の集落でも携帯電話を使用できる環境であったことに驚かされた。先進国が物質的な豊かさを押しつけていっている感じがした。廃棄物の中間処理場と最終処分場の視察では住宅やマンションがすぐ近くにある中でゴミが野ざらしで処理されていたり、山間部の水田が広がる自然豊かな地域の川のすぐ横に廃液が処理できなくなったプールが放置されたままの最終処分場あり、現在は無計画に拡大していったりしている。家族を大切に、宗教を重んじるすばらしい文化が根付いているネパールに対して、私たちができることは何なのかを問いかけている思いがした。

・今回の研修の大きなテーマであった、安心して学習することができる日本でなぜ学習意欲が低下しているのかについても考えることができた。安心して学習することができるが故に、「やらされる学習」について考える余裕ができたのではないだろうか。今やっている学習が必要かどうか?という一見、大切な動機付けに関わる問題であるようにも考えられるが、今やらなければならないことをやらない理由づくりを一生懸命しているように感じられた。考えたり疑問を持ったりすることは大切なことだが、与えられた環境の中で今やらなければならないことを真面目にやるという部分が弱いのではないかと考えさせられた。

・短い滞在期間ではあったが、一緒に行動して下さった JICA の西前さんや通訳のラグさんから教えていただいたネパールの文化や歴史、言語、未だに残っているカースト制度、宗教、教育、生活環境、食文化など、「今のネパール」について話を聞くことができたことがとてもありがたかった。現地で活躍されている方々の取り組みを理解する参考になった。

[3]特に印象に残った視察・訪問先を3つ挙げ、その内容をご記入ください。

視察・訪問先	所感
カブリ郡パトレケット村 ホームステイ ラメシュさん宅	おじいさん(ラメシュさん)、おばあさん、お嫁さん2人、赤ちゃん2人の6人で生活をしていた。息子さん2人もドバイとカトマンズに出稼ぎに行っていると教えてくれた。ラメシュさんが赤ちゃん一人の面倒を見ておばあさんとお嫁さんとで家事を行っていた。トウモロコシを育て、水牛と牛を飼い、ミルクを売って現金収入を得ていた。生活の様子につ

	<p>いて話をしてくれて、子どものための宗教的行事についても話してくれた。朝早くから牛のお世話をして働き、おばあさんは、花を摘んできてお別れの首飾りを準備してくれた。じっくりと話を聞いてくれて丁寧に話してくれる姿勢がとても温かかった。日本には「おもてなし」の文化があるが、人と出会いを大切にする文化がネパールにもあった。</p>	
<p>カトマンズ郡での環境教育の活動視察と廃棄物処理場見学</p>	<p>集まってくるゴミがまったくリサイクルにまわされておらず、ゴミの90%がリサイクル可能であることに驚いた。また、中国やインドから支援で送られた収集車が100台あるにもかかわらずほとんどが使用されず放置され、粗大ゴミのようになってしまっていた。海外からの支援物資は様々なゴミを増やすことになっており、そのゴミに対して活動している多くのリサイクル業者では、16歳未満の児童労働の問題を抱えている現実もあった。カトマンズ市内のゴミ問題対策に取り組む際の課題として、市内に新たに流入してきた外国人が多くなり、コミュニティがないため協力がなかなか得られないという話があった。地道に話をして興味を持ってくれるところから一緒に取り組んでいるということであった。</p>	 
<p>シンドウパルチョーク郡 セティデエヒパンチカンニヤ小学校訪問</p>	<p>1年生から3年生までが同じ教室で学習していた。高知県でも複式学級が多いが、3学年複式というのは初めてだった。視察団が行った歌(レッサンピリリ)やジェスチャーゲームなどに積極的に取り組んでくれた。活動を取り入れた学習が少ないということだったが、黒板がなく教具も少ない中で、普段どのような授業が行われているのか、通常の授業を見学してみたかった。</p>	

[4]今後の業務における活用の可能性

貴重な体験を多くの人と共有することで、ネパールに興味を持ってもらいたいと思うとともに、自分にできることはなにかと考えさせる国際理解の授業にも取り組んでいきたい。海外からの留学生との交流の機会を、中学生、小学生まで広げ、異文化に直接触れる機会を多く作るよう計画していきたい。そのためにも、ネパールでの楽しかった経験を中心にして、映像資料等を用いて伝えていくようにしたい。